

特集

角膜知覚を極める

序 論

雑賀司珠也*

今月号の特集は「角膜知覚」を取り上げます。

古くから難治性疾患として知られている「神経麻痺性角膜症」では、山口大学の西田輝夫名誉教授(元 副学長)の基礎的研究から始まった神経ペプチドに注目した新規薬剤治療の開発など、わが国の角膜研究が世界をリードしてきました。

神経麻痺性角膜症の原因には、三叉神経への直接的な外傷以外に、糖尿病、角膜単純ヘルペスウイルス感染症、一部の点眼薬(β ブロッカーなど)も挙げられます。海外ではリコンビナント神経成長因子(recombinant human nerve growth

factor: rhNGF)の点眼投与の臨床使用が認可されました。

一方、かつては不定愁訴とも考えられていた眼球表面の「痛み」ですが、近年は「アイペイン」という積極的な治療介入を要する疾患群であるとの認識も浸透してきました。

本特集では、まず、基礎医学的な立場からの角膜神経支配の復習に始まり、最新の臨床現場での角膜知覚関連疾患の診療について、読者の皆様と勉強できる機会を持つことができました。ぜひ、ご一読をお願い申し上げます。

*Shizuya SAIKA 和歌山県立医科大学眼科学講座